

価値の共約不可能性と多元主義について

On System Thinking, Teleological Structure and Social Morality IV

Essay on Frame work on Value Incommensurability and Value Pluralism

Yasumasa Arai

Senior Professional Chemical Engineer

E-mail: araraiypoll1a@nifty.com

(2016/12/16)

荒井 康全

上席化学工学技士

東京都町田市南つくし野

Tel: 942-795-3348

Abstract : General System Thinking is a theory of an object under concern to be taken as organized fundamental frame with objectives and constraints. This author looks into the meaning of decision making taken into account as "human free will" and "natural causality", so-called. That is to be said, he enquires into the concept of purpose in its human and social dimensions. He does this at this paper, with reference to the concept "Value Incommensurability" and "Value Pluralism", where are clues to resolving the problem. A problem between different bearers of value are presented with both keywords of values under corresponding items in conflict. Through this discussion, he will give four items of proposition on the way of guidance to resolve an incommensurability.

keywords: Bearers of value, Incommensurability, Incomparability, Pluralism,

要約 ; 一般システム思考は、目的と制約条件をもつ対象に関する理論である。著者は、これを人間自由意志と自然因果関係とに還元して意思決定の意味を考察する。本報は、価値の共約不可能性と多元主義についての概念を取り上げ、競合する異なる価値間での認識論的な構造と競合性を解説し、解消の方向を論ずるものである。

キーワード: 価値所有(者)、共約不可能性、比較不可能性、多元主義

目次；

はじめに

1. 共約不可能性について

1.1 用語 incommensurable

1.2 価値の共約不可能性について

1.3 本報での共約不可能性の概要説明

1.3.1 価値の共約不可能性の概念とは

1.3.2 定義としての共約不可能性と比較不可能性との違い

1.3.3 価値の共約不可能性の解決の種類について

1.3.4 構成的共約不可能性について

1.3.5 熟慮することと外的資源の選択～共約不可能性の共約化として

1.3.6 社会的な選択と制度化(S 解説 5. を中心に)

2. 価値多元主義 (Value Pluralism) について

2.1 価値多元主義の思想家から

2.2 価値多元主義 (Value Pluralism) について

3. 結言

付表 付表 1 構成的な共約不可能性の形成と解消過程の図説明 (英文記載)

文献

はじめに

先の報 (Arai, 2013) ¹で、システム思考の目的論の構造をとりあげた。そこでは相互に競合背反する目的価値の問題記述表現法として、双方間での固有価値の内、経済的な価値への変換によるトレード・オフ問題 (パレート解問題) をとりあげた。例としてはクジラの種の保存としての価値所有(者)と、食品資源としてのクジラの種の保存との価値所有(者)であるが、周知のとおり、双方の歩み寄りがほどとなく、経済価値に持ち込む以前の社会的慣習からの価値形態の固持の結果からのコンフリクトになっている。このような状態を学術用語としては「価値の共約不可能性 Value Incommensurability」の状態として概念定義されている。本報では、この概念に着目して、切り口としての価値の多元化、共約不可能性の解消の可能性を一般考察し、さらに共約化へむかう価値の言語・記号化への基盤と課題へと論究することを目的とした。章節は2章構成で 第1章は、異なる価値所有者のコンフリクト、構成的共約不可能性ということ、さらに「愛は金で買えるか？」を経て、価値の多文化論への落ち着き先について述べる。第2章では価値の多文化主義についてとりあげ、Berlin バーリンなど価値多元論の思想から価値多元主義 (Value Pluralism) についての根拠を論じる。

最後に結言では、異なる価値そのものを言語・記号化として認識共有する、いわば「土俵」共有の一元を提言としたいとするものである。これは一元論と多元論とのアンチノミー間での選択問題として、位置するものである。

1. 共約不可能性について

1.1 用語 incommensurable¹

本論での中心となる用語として 和訳を以下に記述する；

*比較の共通尺度や基準が欠如している様。

* (数) 共通の尺度もしくは単位で表現不可能な様; *incommensurable numbers*.

*嫌疑に値するような非整合の様

1.2 価値の共約不可能性について (S 解説、2007) ⁱⁱ

自由や平等の価値はときに共約不可能性(通約不可能性ともいう)とよばれ、これらは共通の尺度に価値を持ち込むことができないという意味で使われている。この価値概念のもつ実際上の理由や合理的な選択については奥行き深い質問を起こすものであり、また具体的な事象での見解の分かれる問題を喚起するものである。この問題は解決に対する無力感²、道徳的ジレンマ、功利主義の蓋然性、自由主義の基盤性などの問題としてあらわれる。

ここでは、主としてスタンフォード哲学百科を参考にして、価値の共約不可能性の本質と可能性についての項目からはじめて、現代の基本的課題を解説、検討し さらに、社会文化的に異なる価値の共存性の基盤となる価値多元化への課題の展望を論ずることを目的とする。

1.3 本報での共約不可能性の概要説明

多文化共約性への思考展開の出発として、Pluralism (価値多元主義) への通路に焦点を置いて述べる。

1.3.1 価値の共約不可能性の概念とは

共約不可能性は抽象的な価値所有(者)間での順位・共存秩序や、排他秩序としてのつよい意識関連をもつ概念として用いられている。ここでの抽象的な価値とは、「自由」や「平等」の価値や「夕映えの美しさ」のような意味を代表する何らかの実体 (Institution、State-of-Affairs) を使って、その意味が表現されるものである。

*用語としての淵源は、古典ギリシャの幾何学で、直角三角形の斜辺が、必ずしも自然数にならないところから、比較のための共通の尺度を用い得ない量があるという意味であった。現代では、広義に拡張され、抽象的秩序としての価値問題として認識され、その比較順位のための共通尺度を未だ見出されていない状態を意味している。典型問題としては異なるキャリアの価値の比較や 愛と金の互換性などが好例となっている。³

1.3.2 定義としての共約不可能性と比較不可能性との違いは 同じとみなす立場と区別する立場がある。 J.Raz(1986)ⁱⁱⁱは、人のキャリアを例にとり、クラリネットの奏者と弁護

¹ Encyclopedia Britannica 辞典

² akraisa もしくは acraisa

³ ここでは、Thomas Kuhn や Fireabend 等の科学哲学史でいう共約不可能性とは異なることを前提としている。因みに、彼らのそれは、アリストテレス物理学とニュートン物理学との意味する実体間の価値の順位尺度の不可能性を意味している。

士のどちらのランクが上かを具体的な比較尺度に変換すること自体ができないとして共約不可能性としてしまう考え方である。一方、Ruth Chang(1997)^{iv}等は、二つ以上の異なる価値実体が競合し、争う社会的事実をみとめ、これを構成的共約不可能性として、「ほぼ等しい」や「On a Par」など、数学上の三分法 (Trigotomy) にさらに第4の区分を導入しようとする主張がある。

1.3.3 価値の共約不可能性の解決の種類について

共約不可能性は、共通尺度の欠如した状態で競合したばあいの解決方法を想定し、これまでのところ、3つの概念が上げられる。

第一番目はトランプイング **Trumping** であり、これはトランプ・カードゲームでのジョーカーを意味し、このカードがだされると絶対的の優先権をもつように、すでに絶対的な価値権威が存在している場合を意味する。(J.Griffin 1986) ^v

第二番目は、トレード・オフ **Trade-Off** である。比較価値の共通尺度を認め合い、価値競合者(対象)間での順位の設定にあたって、利得獲得の上位者と利得喪失補償の下位者との間の調整を存在させようとする場合である。(David Wiggins1997) ^{vi} (Henry Richardson,1994) ^{vii}

第三番目は、合理的な比較順位が決定しうる場合である。このもとでは、順位の下位のものの利得喪失補償はかならずしも保障されない。(Henry Richardson,1994)

*第一と第三の区別がここでは不明瞭であるが、前者は「賭け」を想定すると分かりやすい。後者は、そもそも「合理的」という意味を共役可能な価値設定したことを前提とすればすでに不共約は解消しているとみて解釈できる。(筆者は生存の権利としての自然権がこれに相当すると考える)

1.3.4 構成的共約不可能性について

付表に、異なる価値所有(者) different Bearers of Value の争い conflict の形成と落着のシナリオを示した。ここでは、凡例として「愛と金」をとりあげる。問題は あるひとが、十分な金を配偶者に残して家を1か月離れるというものである。第1段階では、婚姻関係価値 (Companionship) と金銭価値の登場である。第2段階で、conflict が発生する。この様相が(すでに説明したように)3つに分かれる;第1番目は、Trumping のケースである。第2番目は、トレードオフのないランキングの場合で、この例では「金」が「婚姻関係」よりも順位が上となっているが、大いに議論をよぶところであろう。第3番目は、Trade-Off のある場合を示した。ここでは、「金」がランク1を獲得し、「婚姻関係」は、その補償分を獲得するマトリクスになっているが、理屈の上では補償分をマトリクス要素が考えられるので 3 x 3のマトリクスとみることができる。上の例では「金」が要素(1, 1)にあるが、ここを取って trumping にしておく考え方もある。(1, 1)はいわば「神託」(つまり「賭け」)といえよう。

「付表1 構成的な共約不可能性の形成と解消過程の図説明」を参照されたい

1.3.5 熟慮すること⁴と外的資源の選択~共約不可能性の解消として

⁴ 熟慮 deliberate

価値の共約不可能性が生じたとき、道徳的な葛藤や適当な「落としどころ」⁵が実際には、共約可能に導いていることを、我々は暗に知っているところである。そこでこの「落としどころ」が、正当化されたとして、その理論的もしくは、合理的な根拠、つまり納得のいく「理屈づけ」⁶が、それを進める動機となるはずである。共約不可能性に解くのに、何が正しく判断されるべきかについての観点での哲学的文献と社会心理学もしくは社会科学の意思決定に関する文献は多い。このS解説の著者たちは、このなかで、ほぼ共通に基盤になる選択肢は3つあると指摘する；ひとつは、共通材 (Commodity)；市場に売るために持ち込まれた対象 (Object) である。

ふたつ目は、貨幣 (Currency)；共通材の代役 (stand-in) として働く対象 (Object) である。そして三つめは 非共通材 (Non-commodity)；引き渡すことができない (心身の痛み)、もしくは、市場で取引することによってそれ自体の価値のある部分が失われる (例、友情) 対象 (Object) である。彼らは、これについての公開実験がころみだが、その結果は (共通材と貨幣) の取引の価値の決定は容易であること、また、非共通材は、貨幣よりも順位がたかいことに共通の価値を見出すことは容易であるものであったという。

したがって、ここに共約不可能性についての規範的価値は保存されることが判明しているといえよう。

このS解説(2007)での追及は、なぜ、非共通材と貨幣との順位秩序が存在しているかに続いている。生活上の善 (Life goods) の裏側にある「構成的善 (Constitutive goods)」の様態 (Shape) にあられ、そこに「価値の源 (Source of Value)」があるからとし、それが、問題のはじめに共約不可能性としての競合 conflict としてあらわれたとする。また、「嘘も方便 (Rightful Lies)」⁷など、そののちに道徳的な禍根につながることの指摘もされている。(Alan Struder, 1998, 1561-1564) ⁸ 伝統のあるふるい社会や集落では、その「社会的風習 (Social Convention)」によって、そのときどきの状況で、掟や慣習によって共約化されると言及する。しかし、解決の仕方に、賢さのレベルの差がのこることを 周りは知っている。国は違っても、そのような共約の基盤は存在するであろう。

問題は、都市はもとより、宗教を含む民族文化など、相異なる社会文化背景の価値所有 (Bearers of Value) のような「価値の源 (Source of Value)」と「社会的風習 (Social Convention)」が共約不可能性課題としてシステムティックな形で、社会的な研究機関の俎上に認識されていない場合である。ここまでの言及がされている。⁹

*無名称価値 'Nameless Values'について

ここの節では、価値の共約不可能性についての多く、価値共通性の尺度を得たあとはその取引での「最適決定」もしくは「最大化」に関する具体的な価値の工学的課題 (実務的利得理論) に落されて、位置づけられることになる。これは 人類生存するかぎりの永続的な営みであり、またその意義は不易であろう。

⁵ akrasia 争いの手打ちとする「落としどころ」(筆者)

⁶ reasoning

⁷ 「嘘も方便」 permissibility of lying in terms of commensurable values is to misunderstand the wrong in lying.

⁸ (Alan Struder, 1998, 1561-1564), "Incommensurable Goods, Rightful Lies, and the Wrongness of Fraud", University of Pennsylvania Law Review, 146:1529-1567.

⁹ この課題は、Berlin らによる価値多元主義 Pluralism の 思想へと繋がるものと理解する。

この哲学的な価値論も S 解説では触れているが、とくに、留意しておくところは、具体的比較に落としこむための項目（ここでは respect と表現しているが）、数学的にとらえるならば要因（因子 factors）への翻訳の根拠であろう。問題のモデル（In question）となる項目の妥当性は、納得する因子で取引するので 取引成立時点で 成立するということであろう。ところが、要因のなかでは 上記の non-commodity の要素が入り込む、この説明がないと取引に障害が生ずることになる。

数理統計を心得るものなら、そのような計数化要因の指数と計量的な指数間の任意の関数関係として翻訳をして、比較可能性を知るところであろう。S 解説では、無名称価値 ‘Nameless Values’ という用語でそれを説明しているが、これを意味していると筆者は理解している¹⁰。

1.3.6 社会的な選択と制度化

解説 S は、社会的な選択と制度化についてのこれまでの調査研究を通じて、社会や制度の上での粗上に共約不可能性問題の存在を認識することの意味をとりあげてきた。また、特に 異なる 価値所有間の争いを生む代表的なケースとしては、構成的共約不可能性として現れる場合や、その問題が往々にしてその価値を所有している社会や文化背景の知恵のなかで解決にいたることしてきた。さらに切り口として、以下のような 身近なヒント（external resource）がある 4 つが指摘された；

* 個人間レベルであらわれた問題と社会レベルであらわれる問題との間にヒントになるアナロジーがありうること、

* 個人としてはすでに問題を 共約可能としての比較判断ベースを決めていて、むしろ 社会的次元でのランク獲得決着のための議論の場を求めている場合のありうること、

* 法律の制定にあたり、共約不可能性の事実背景があらかじめ考慮され、問題解決の自由度の幅の余裕をくみこんでおく可能性があること。

* 法律の適用に地域的、地方的な違いを積極的に考慮すべきかどうかを考慮することの意味がありうる場合があること。

2. 価値多元主義（Value Pluralism）について

前章では、共約不可能性における課題の解決として、プラクティカルな場での異なる価値所有(者)間での取引のなかという次元からの問題が提示された。これらは、特に政治的・法秩序的なもとでの人間自由と民主主義社会への裏付けとして価値の多文化主義への積極的な哲学的転換が展開されてきた。この面で、特に、Joseph Raz(1986)^{viii}と Issiah Berlin(1969)^{ix}らの提言に注目すべきとしている。この章では、価値多元主義に焦点を当て、価値共約化の基礎的な位置を考察する。

2.1 価値多元主義の思想家から

2.1.1 I・カント「多元論」の源流として¹¹

西洋思想では、世界の構成を、プラトンを淵源とする「イデア」と「現象」の二元論に基礎をおいていることが、ひろく認められるところである。人間意識としての「価値」はこの二元をつなげ

¹⁰無名称価値 ‘Nameless Values’；筆者の理解としては、たとえば多因子の重回帰分析、主成分分析や判別関数などにみるような多変量(要因)の数理統計モデル的による支配的なデータ分散軸である固有ベクトル空間への射影尺度に持ち込みもその例となるであろう。

¹¹項目 多元論 岩波哲学・思想事典

る意志活動として、如何なるモデルで考えるかが、哲学史での中心課題であった。カントは、ライプニッツのような世界が「予定調和」という一元的価値に帰着するとは断定せず、彼の認識哲学から、人間がもつ自由意志からの価値の発現の多元化を支持した。その点で彼が多元論の近代の先駆けとなったという評価がある。すなわち、「(カントは) 多元論を、地球上の国々や社会の独立性・独自性を認めながら、自らのそれに固執せず、世界的市民として自らを捉える考え方をしている。これは、現代の西欧民主主義社会が掲げる〈政治的多元論〉の先駆であると考えられる。」(多元論¹²⁾ その意味では、彼の認識哲学が価値の共約不可能性の解消(あるいは共約化)のための思考の共通場(「土俵」)を提供しているとも言えよう。

2.1.2 Issiah Berlin の 多元主義 (Pluralism)¹³

彼の思想は、根幹が二つあり、ひとつは多元主義と自由主義である、二つ目は価値と行動の選択の自由であるといわれる。他との検討・議論(自由と制約)を通じて行動選択と内容を修正し、収束するものである。その過程での高度視点からの合理性が傷つくことがあっても、個々の選択を優先する。また、選択が現実的な地位を得ているのはその社会の道德の裏付けの信頼があることに拠っているとす。その道德とはなにか。それはアプリアリな能力である理性が要求するものとしている。彼の意味する道德はそもそも他者との共存を意志するものとする。しかし、理性は、(人間の有限性のフィルターを経過するので)無誤謬であるわけではない。また、理性が犯す誤謬への修正は、経験經由の認識(悟性)によっておこなわれるとする。その意味では、カントの道德律(理性)と格律(悟性)との緊張関係を源流とするものであり、Berlinの哲学はカントの認識哲学を背景とすると理解できよう。彼は、ナチスによって大陸を追われ、英国に亡命したが、後の彼の哲学展開の特徴は、理性そのものが、規範的な判断力以上に、反省的な判断力への比重を深めたといえよう。すなわち個人個人による価値の選択の自由を重視したと考えられる。つまり、対象の価値に対して、集団よりも、まず個人の意志を優先するところにあったといえる。

さらに注目すべき哲学者として

John Gray^x Robert B. Talisse その背景としてのバーリンに加えて、G.E.Moore^{xi}あげておきたい。Gムーア(1873-1958)は哲学的懐疑主義¹⁴に対抗して、常識¹⁵を支持し主張するものであり、後にウィトゲンシュタインの思考に強い影響を与えた。

2.2 価値多元主義 (Value Pluralism) について (Value pluralism,2015)¹⁶

倫理学での術語で、倫理多元主義もしくは道德多元主義ともよばれている。この理念においては、価値は単一ではなく、複数存在するものであり、それぞれが等しく正しく、かつ基本的であり、なおそれらが相互に争わないものとするものである。価値多元主義では、多くの場合、それら価値相互が比較できない価値を共約不可能性と認め受容される思想である。その意味で、目的性(客観性)に順位がない。

Max Weberを代表する価値一元主義 Monism と対するものである。価値多元主義は、規範的倫理学というよりはメタ倫理であり、それ自体が、価値の集合である。オクスフォードの哲学者で歴

¹³ 項目 バーリン 岩波哲学・思想事典

¹⁴ [philosophical skepticism](#)

¹⁵ [common sense](#)

¹⁶ Value pluralism http://en.wikipedia.org/wiki/Value_pluralism (2015)

史家である Isaiah Berlin が最初に客観的（目的的）価値多元主義の研究を命題とし、ひとつの地位を獲得したと評価されている。関連する基盤的な価値の理念が、キリスト教としては異教である多神教を含むものであり、一方で、Max Weber を代表する伝統的な西洋思想基盤と対立する可能性を秘めている。Berlin を継承して Charles Blatterg や Ronald Dworkin 等が続く。特に後者は価値一元論の立場から平等の自由理論を展開し、「なにを議論するかについての平等性」¹⁷を展開した。一方 Brown を代表する Berlin らは、自由、平等、効率、創造性などの人間善について社会背景として変化していく視点のなかで本来、共約可能であるべきものを避けているという批判もある。

「思慮ある民主主義」の Robert Talisse^{xiii}や 非公式論理や内的認識論からもたらされる矛盾から William Galston、Richard Flathman、John Gray らは、基本的には価値多元主義からの Berlin 批判と発展的展開の流れとみることされる。因みに William Galston はビル・クリントン政権内で起用され、政策に関与している。

3. 結言

3.1 異なる価値所有者のコンフリクト

スタンフォード哲学ライブラリーというのがあり、その記述はわかりやすく、内容がしっかりしている。ここで、"Incommensurability" という 22 ページほどの解説には憑りつかれてしまい、にらめっこして過ごす羽目の日々が続いた。日本語で「共約不可能性」である。これは、価値観の異なる二者がいて 論理的な筋で比較して、その違いを位置づけ順位付けが得られていない、あるいはそれが不可能な状態性を意味している。

ところで、この稿の執筆中のニュースで、水族館などで人気の定番であるイルカやクジラ・ショーの役者候補調達に、追い込み漁で捕ったものを使うことが、その筋の国際機関から反対され、従わないときは日本の水族館は除名という報道がつかえられた。これなどはその典型問題を意味しよう。

3.2 構成的共約不可能性ということ

これは、ふたつの異なる価値の所有者(英語の表現で *bearers of different value* と表現している)が争う(*conflict*)になる場合に生ずる概念で。これは同一人のなかのふたつでもよい(ハムレット)。多文化主義で特に焦点になるのは、異なる価値背景の二人の役者が登場する「構成的」とあえて問題の焦点を絞った課題である。

これをどう解決するか、たとえば食べ物の量を分けあうような個数という尺度を双方がみとめる場合は、比較可能性 (*Comparability*)が見出された場合として、その尺度を通じての解決の途が見える可能性があるので、双方が同意すれば協議など共役可能性になる。したがって比較尺度を求めるとするのが第一のポイントとなろう。

3.3 共約不可能性の有名なのが、愛は金で買えるか?という形で登場する。

あるひとが配偶者に一定の財産を残して、一定期間、家を離れる。「愛と金」'*Companionship and Money*'という表現が使われている。短絡的には、言語道断、憤慨をもってその「あるひと」が社会的非難を受けるようなイメージがある。その社会的慣習から自ずから決まる価値ランキング順位

¹⁷ the [equality of what](#) debate

問題であるとするものである。実はこれを思考のフィルターを通過させ、価値の共約性としてほんとうはどうなのかと考え、そこに焦点をあてる社会学的な研究があっても悪くはないはずである。

* 共約不可能性の落ち着き先について

** 多文化主義での共約不可性問題の存在を人間存在価値問題として制度的 (Institutional) に位置づけること。(「土俵」の提案)

** 比較可能性のための共通尺度とトレード・オフ・モデル研究を国際間の専門研究制度で行うこと (例: 気候変動政府間パネル)

** 裁判は勝てる見込みがないときは避けること。勝てる裁判の研究をすること

(例; TPP の運営のなかで現れるであろう価値の共約不可能性の位置づけが考えられる

ISDS (投資者 - 国家間係争裁定裁判所) など)

3.4 価値多文化主義の落ち着き先について

価値の共有性の根本的根拠を探る問題が Berlin バーリンから提起されて以降、民主主義社会の根底倫理の底流となっている。この根底にある異なる価値の所有(者)も承認する哲学根拠が必要になる。これは多元主義からするとアンチノミー (二律背反) の陥穽に落ちる危険性があるが、「超然とした第三者」の提供する場(「土俵」)と規範の「目」が共有される必要がある。ここに権威選択の問題が人類の前に迫りくるといえよう。筆者はカントに、キリスト教を超えた多元主義の影響を窺がいみることを知る。それゆえ、彼の哲学をその「土俵」に選ぶことを推奨したい。

哲学者コジェーヴからは、次の4つの権威が上げられている。つまり父性的な権威、征服者の権威、賢者の権威、裁判官の権威である。歴史の反省からみると、どれも単独では、「土俵」に成り得ていないことを知る。制度(Institution)としてはこれらの組み合わせであろう。国連憲章にそのモデルのひとつをみるが、有効に形成し作用しているかどうかは、周知のとおりであるが、思考の停止は危険であり、人類の総合知としての中心課題としてさらなる叡智が必要である。

謝辞 本稿は総合知学会 2015年6月の研究例会において、発表したものである。該例会メンバーの研究内容への真摯なる関心に感謝するものである。

付表1 構成的な共約不可能性の形成と解消過程の図説

(以下に掲載する)

付表 1 構成的な共約不可能性の形成と解消過程の図説明

Appendix :

Illustration of Stages in Constitutive Incommensurability

As Constitutional Incommensurability, schematic illustration is taken in terms of ‘Companionship and Money’. Consider being offered a significant money to leave one’s spouse for a month. Figure 1 shows an initiation on drama where different bearers of value on stage.

This is a question, that a person leaves money to companion for his which the author shows steps to constitute of potential conflict between two bearers of value under unavoidable occasion.(See Figure 1)



Figure 1 Different Bearers of Value

Figure 2 is an stage of collide each other between values.

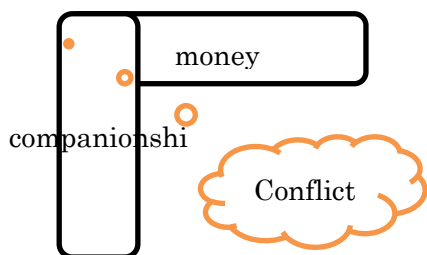


Figure 2 Having a Value conflict

Figure 3 a side is absolutely supreme under emergence circumstance (ex. lifesaving)or absolute ordered(ex. religious commandment),by which both of sides are undermined in agree, which is termed Trumping state. But were each bearer under different ruler, this would be going to conflict. The indignity is often here that they would typically experienced in response to such money offering, under modern society.

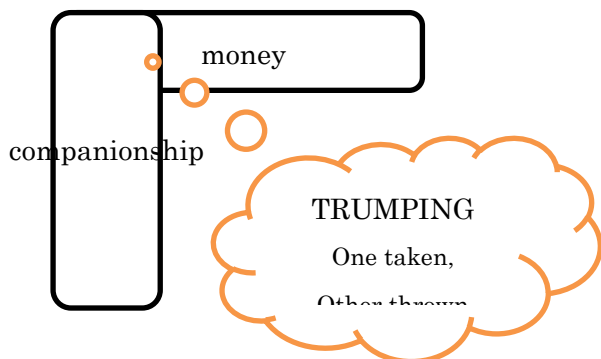


Figure 3 One kicks to rule out other

Figure 4 shows an illustration to ranking order scheme, where the case is for money takes high priority than companionship. A resolution scheme under offered by the third, has to be necessary and to be accepted.

This figure has possibility of simulation for each bearer’s behavior. For instance, Christianity moral convention is against this scheme of configuration. It claims to companion rank is to be located in matrix element (1,1) from now element(2,1). After then money rank now in element(1,1) would (forcedly) to element(1,2); rank 2 level. This argument is a typically normative case in the society.

This case is “Trade and Off “ resolution to Incommensurability.

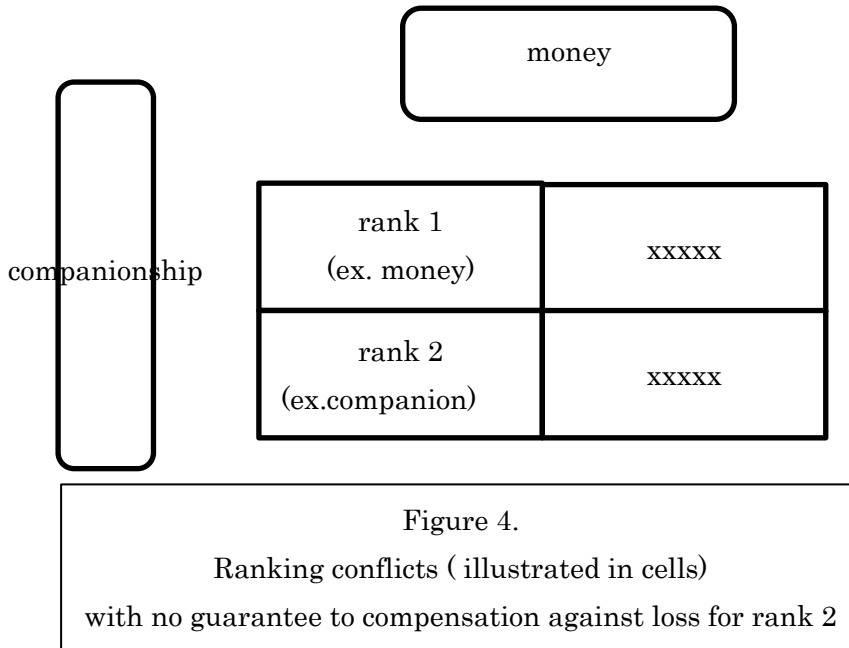
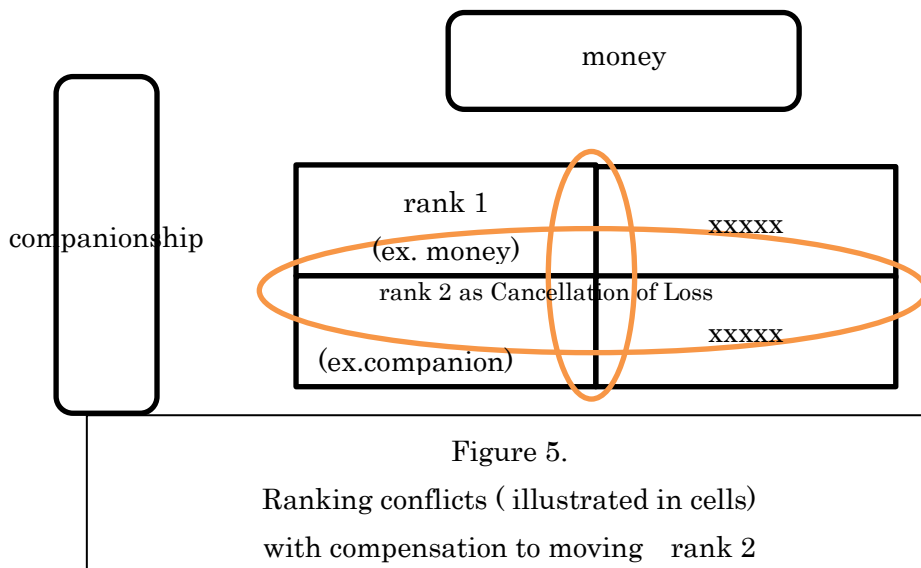


Figure 5 shows an illustration of ranking gain and ranking compensation loss scheme. Substantially, this matrix is a 3 rows by 3 columns. At the figure, (2,1),(2,2),and (2,3), (1,2),and (2,3) are all Loss compensation zone.



-
- i Y. Arai, (2013)“On System Thinking, Teleological Structure and Social Morality- Reflection on Kant’s Critique of Judgement”; Journal of the Society of Multi-disciplinary Knowledge, p.107-154, vol.013/1, ISSN 1345-4889
- ii S 解説,(2007) Stanford Encyclopedia of Philosophy,(2007)“ Incommensurability Values” ,First published Mon, July23,2007
- iii Raz , J, (1986) The Morality of Freedom, Oxford;Clarendon Press.
- iv Chang, Ruth (1997) “Introduction”, Incommensurability, Incomparability , and Practical Reason, Cambridge, Harvard University Press/
- v Griffin, J. (1986) Well-Being; In Meaning, Measurement, and Importance, Oxford Clarendon Press.
- vi Wiggins, David (1997) “Incommensurability; Four Proposals”, in incommensurability, Incomparability, and Practical Reason, R.Chang (ed.), Cambridge; Harvard University Press.
- vii Richardson ,Henry(1994) Practical Reasoning about Final Ends, Cambridge; Cambridge University Press
- viii Raz , J, (1986) The Morality of Freedom, Oxford;Clarendon Press.
- ix Berlin,Issiah(1969) “Two Concept of Liberty”, in Four Essays on Liberty,New York; Oxford University Press.
- x Gray, John [http://en.wikipedia.org/wiki/John_Gray_\(philosopher\)](http://en.wikipedia.org/wiki/John_Gray_(philosopher))
- xi G.E. Moore https://en.wikipedia.org/wiki/G._E._Moore
- xii Robert B. Talisse http://en.wikipedia.org/wiki/Robert_B._Talissee